

5. 転職や離職の経験

以上のような状況の中で、折角就職しても多くの人が転職や離職を余儀なくされたことが語られている。中には、37回も転職している例も聞き取られている。

いずれも、事情を話せないためや、ハンセン病であったことが知られるのをおそれたことである。

(1) 退所・就職の妨害

「大学を卒業したあと金融関係に勤務、2年目あたりに再発し、園へ行った。担当医に『仕事が厳しく、仕事しながら、治療はむずかしい。再入所しなければ、新薬は出せない』と言われ、無理をして月1回受診し、新薬を出してもらえるよう毎回お願いしてきたが、担当医は首をたてにふらず、『らい予防法を知っていますか？薬を出せば僕が罰せられます』と言われてしまった。…今思えばくやしいです。結局2年間通って病気もわるくなるし、特に鼻がつまって仕事に支障をきたすし…。もうどうでもよくなって、『もういいです』と担当医のところをはなれ、藤楓協会に行ってDDSの錠剤をゆずってもらって。でもね 僕プロミンうちすぎていて耐性があるそのくすりは無駄だったんですよ。結局症状ひどくなって覚悟して、担当医に診断書かいてもらって 3年休職してもとの職場に戻るつもりでした。ところが、会社関連の診療所の診断でないと言われ内科にいったら慶応大の皮膚科に行かされそのDrから『長いこと本当に治療してこられましたね』と担当医は後輩だよと担当医と同じ内容の診断書をやっど書いてもらった。ところが上司が、変だと気づき、『本当の病気は？』と問いつめられ、ついに本当のことを言ってしまった。社長など主な人以外には知られたけれど3年間休職はさせてくれた。但、自分としては、それで会社に戻れないことは、わかっていた。」(1938年生 男性)

(2) 転職経験

「年輩の人からいろんな事聞かれる。何もいえなくなる。家庭の事も聞かれるが、言えない。結局職場にいられなくなる。変人扱いされる。職場も転々と変った。実に37回も転職している。そこそこの会社には入れない。空白もあるし、結局、重労働しかなかった。」(1950年生 男性)

「新良田教室を卒業して友人をたよって鹿児島にいき、なかなか就職できなかったことでひねくれたりもした。物産会社の事務に就職したが、そこで園にいた人とバッタリあって(その人は7年勤めていたが)その3日後、その人はやめていた。自分の仲間がその当時病気をばらされるのではないかと怖かった。自分のせいだと思いその職場を半年でやめた。」(1941年生 女性)

「第1回目は倒産。2回目は美容院で病気のことがうわさになり解雇される。3回目は結婚をすすめられ退職した。自立した生活がしたいので東京に出たが、資金がないので

全生園の寮母さんに相談、住み込みの仕事を紹介してもらったが、真の自立にはほど遠かった。」(1957年生 女性)

「逃げるときも、沖縄に行くと寮友に言って記念写真も撮った。皆一枚ずつ持っていたが、自分は写真の中に他の人の後遺症が写っていて、(関係が)分かるのがこわかったから焼き捨てた。皆は鉄工所とか無理な仕事だと再発するぞ、気を付けると言ってくれた。友達のところへ行った。仕事の段取りをしてくれていた。友だちは園友の人。(園内でバンドを一緒にやっていた。バレるのではないかと。仕事は転々とした。お菓子工場で働いていたときに、たまたま同郷の知人にそこで働いているのを見られ、トンずらしたことも。沖縄では自分の経歴を知られるのを恐れて仕事を転々とした。仕事のあと、夜は勉強して。楽譜を見て、祖母に手紙を書くために。最初は内地に行くための旅費稼ぎ。横浜に行ってバンドの見習いになるため。23歳のころ結婚しようと思って園まで行って健康診断を受けた。結果は良かったが、『もういい、診断書を書こう。退所証明を出そう』と言われたが断った。『もしもらっても、(園の)門を出たら破り捨てるわ』と。もし(持って帰って)家で見つかったらどうする。だから退所証明は持っていなかった。

先に出てきていた園友が呼んでくれた。最初は町工場へ行って、次に車両会社に社外工で入って。ところが半年くらい経ったときに、社会保険に入れるから、と。検診があるとされて。検診の日には休んだ。血を採られたらこわい、バレると思っていた。次の日に出るとやっぱり血液検査を受けさせられた。その日会社を辞めた。結果が出てからでは遅い、と思っていた。次は大阪に行って、ロボット溶接の資格を取って働いた。」(1935年生 男性 1951年退所)

その他、転職経験に以下のような例が見られる。

「園の不自由者の世話(1週間)・豆腐づくりで市場にだす・洋裁技術習う・妹の経営するホテルの手伝い・カトリック教会内の洋裁作業所・従兄が勤務していた寝具リース会社(約30年間) 従兄の紹介で71歳まで勤務」(1930年生 女性)

「演歌歌手、バンドマン、タクシー運転手。(生活の足しになる、収入の多いのを目指した)。履歴の要らない職業の中で。」(1931年生 男性)

「最初のところでは、履歴のつじつまをうまくあわせられなくて不信がられ、2回目のところでは、知覚マヒが災いして、体がついていけず、不採用と離職を余儀なくされた。」(1937年生 男性)

「ヤオヤの住込み ヤクザのつかい走り 一杯呑み屋 荷役会社 キッサ店経営 無職」(1942年生 男性)

「新聞配達に住込み。社会保険や年金もない。タコ部屋生活」(1942年生 男性)

(3) 仕事の内容

公務員、療養所の仕事等について人もいるが、多くは、「病気であることを知られる恐れが少ない」「履歴書のいらぬような仕事」、自営、農業、重労働、不安定労働であり、タクシードライバーも多い。比較的安定しているのは、身内や知り合いの「つて」をたどっての就職である。

自営、農業

自転車修理店、農業、アンマ・マッサージ、養鶏飼料の販売、食料品屋、新聞社を設立、家業、キッサ店経営、闇米販売

公務員等

公務員、ハンセン病予防協会の書記、療養所の医事班長、栄養班長、福祉室長等、園の不自由者の世話、豆腐づくり

企業

寝具リース会社、印刷所、ボイラー関係運送会社、タクシー運転手、タクシーの無線配車、金融関係、ガラス工場、トラック長距離運転手、ゴルフ場、ガラス工場、輸出用のラジオの組立て、仕上げの仕事、プラスチックの営業、鉄工所、機械関係、工場長、経理

肉体労働

プレス加工、建築現場、大工、機械修理や車修理の仕事、電気工事

商店等

ホテルの手伝い、米軍基地内のメイド、ハウスキーパー、生命保険の外交員、カトリック教会内の洋裁作業所、倉庫地帯でチェッカーの仕事、住み込みのそば屋、病院の掃除婦、旅館、居酒屋一杯呑み屋

職人等

住み込みの仕事(木杵職人)、演歌歌手、バンドマン、ヤオヤの住込み、ヤクザのつかい走り、新聞配達の仕事

(4) 仕事の苦勞

仕事に就けても、苦勞は耐えなかった。特にハンセン病であることを隠すために。

病を隠す

「退所後、高校を卒業して、本島へ上京。米軍基地内のメイド、ハウスキーパーなどに就いた。結婚後、生命保険の外交員などで働いた。その間ハンセン病であることは一切伏せていた。」(1944年生 女性)

「退職時に、身障手帳4級も取得、今までは、取得が、病名を知られるきっかけになると思い、できなかった。」(1947年生 男性)

仕事がうまく出来ない

「経理に最初からつけたので。クリスチャンだったので紹介されたのがクリスチャンの

社長さんだったのでよかった。経理はお金を扱うので信用がなくてはならない。だが、病気のせいで（手が変形）お金を数えるのにお札の計算がなかなか出来ない。つかめない。」(1926年生 男性)

「小売店をしている時にみんなが掛けで買い物して運転資金がなくなった。掛けで買う人達を拒否したり、請求したりすることはできなかった。」(1918年生 男性)

自分からへりくだる

「失対事業に行ってる時も自分からへりくだっていた。」(同上)

再発の恐れの中で

「退所後、1年間の休職期間が残っていた。休職中に電気工事の仕事（知人の）を手伝ったりしていたら、そちらのことも面白くなり、復職の話もあったが、電気の仕事をするようになった。特に転職を余儀なくされたわけではないが、”再発したら...”という思いは2～3年の間あった。」(1934年生 男性)

(5) 転職の理由

転職は、多くの場合、ハンセン病が原因であるが、病気だと分かって解雇されるときだけではなく、判明しそうな時点で、居づらくなり自ら辞めるような形になる事例が多い。

病気が噂になり解雇

「第1回目は倒産。2回目は美容院で病気がことがうわさになり解雇される。3回目は結婚をすすめられ退職した。自立した生活がしたいので東京に出たが、資金がないので療養所の寮母さんに相談、住み込みの仕事を紹介してもらったが、真の自立にはほど遠かった。」(1957年生 女性)

倒産ではあるが

「住み込みの仕事（木杵職人）をしていたとき蓄膿症で手術することになったが保険証がなかった。そのため園に頼んで手術してもらった。このことがあって、仕事場に戻ったときから、親方、特に奥さんの態度が変わった。食事は家族と一緒にままだったが、風呂が最後にまわされるようになり、自分だけ近くの風呂を使うようになり、洗濯も自分の物を自分が洗うようになった。倒産により退職となった。」(1939年生 男性)

上司が気づく

「上司が、変だと気づき、「本当の病気は？」と問いつめられ、ついに本当のことを言ってしまった。社長など主な人以外には知られたけれど3年間休職はさせてくれた。但、自分としては、それで会社に戻れないことは、わかっていた。」(1938年生 男性)

「最初のところでは、履歴のつじつまをうまくあわせられなくて不信がられ、2回目の

ところでは、知覚マヒが災いして、体がついていけず、不採用と離職を余儀なくされた。」
(1937年生 男性)

(6) 転職経験無し

病気による転職経験なしと応えた人もいるが、病気を知られなかった事によると応えた場合もあった

「退所後もそれ以前と同様、家政婦の仕事に就いた。知っている人のいない所を選んでつとめていたのでやむを得ず転職、離職するようなこともなかった。(1944年生 女性)